

小豆島の民俗と伊勢大神楽

神野知恵

目次

1. はじめに	
1-1. 本稿の主旨	67
1-2. 伊勢大神楽の回檀とは	68
1-3. 森本忠太夫組による小豆島回檀	69
1-4. 神楽師三木浩一氏について	71
2. 小豆島の人々の暮らしとの関わり	
2-1. 水産業	73
2-2. 農業および食品加工業	77
2-3. 旅館業、その他の産業	78
3. 小豆島の民俗信仰との関わり	
3-1. 伊勢大神楽が清める家々の神	79
3-2. 土庄町各地の寺社、祠	81
3-3. 伊勢大神楽に対する信仰の特徴	83
4. 小豆島の祭り・民俗芸能との関わり	
4-1. 土庄町王子権現・住吉神社の獅子頭と芝居舞台	85
4-2. 小豆島の秋祭りとの関連	89
4-3. 舞や囃子の伝播	93
5. 結論	93
参考文献	97

1. はじめに

1-1. 本稿の主旨

「伊勢大神楽^{いせだいかぐら}」とは、三重県桑名市太夫および四日市市東阿倉川を根拠地とし、厄祓いの獅子舞や「放下芸」と呼ばれる曲芸を演じながら西日本各地を巡業する芸能集団、およびその芸能のことを指す。かつては伊勢神宮の神札を配り、現在は伊勢大神楽講社の神札を配り歩くため、その獅子舞を見れば伊勢参詣に代わる功德があると信じられ「代神楽」とも表記された。これがのちに美称として「大神楽」「太神楽」と表記されるようになったと言われている。1954年には三重県指定無形文化財、1981年には国の重要無形民俗文化財¹⁾に指定され、現在でも伊勢大神楽講社に所属する山本源太夫

組、森本忠太夫組、山本勤太夫組、加藤菊太夫組、石川源太夫組の5組の神楽師たちがこれにより生計をたてている。

伊勢大神楽の先行研究は、歴史研究が中心である。伊勢大神楽全体に関する戦後の先行研究には、堀田吉雄によるもの²⁾が最も古い。その後は、北川央によって歴史学的な体系的研究が行われた³⁾。また近年では、篠笛奏者の森田玲による伊勢大神楽の笛の旋律の研究⁴⁾、黛友明⁵⁾や森川奈津美⁶⁾といった若手研究者による論文が発表されるなど研究が盛んになりつつある。しかし、それぞれの団体が訪れる各地域の民俗文化のなかで、地域の人々が伊勢大神楽をどのように迎えているのか、大神楽側では巡業に際して地域の環境や信仰に寄り添い、どのような配慮や工夫を重ねてきたのか、また直接的な芸の伝播だけでなく、地域にどのような文化的影響を与えて来たのかなど、地理、季節、人物、信仰、交通等々の面から詳細に見た研究は意外にもあまり多くない。彼らが訪れる地域の市町村史においても「年中行事」もしくは「住居（カマド）」の項や「交通、交易、訪ね人」の項に「何月頃、大神楽（獅子舞）が来た」とだけ書かれることが多く、地域住民による芸能ではないという前提からか、詳細に語られることは多くはない。既存の市町村史の分類項目では、彼らと地域の民俗との接点については記述しにくいと言えるだろう。

とくに本稿で紹介する小豆島やその他の瀬戸内の島々に関しては資料が少ない。伊勢大神楽は西日本各地を廻るが四国本土は基本的には廻らない。そのため香川県、愛媛県などの県内で起きている事象として扱われにくく、それぞれの県民にもあまり知られていない。香川民俗の研究者である水野一典が記している複数の論考⁷⁾が当地の先行研究としては全てである。しかし、日本の民俗学が初期から瀬戸内海の沿岸部や島嶼地域に関心を持ってきたように、当地は民俗文化が色濃く残っている地域であり、またこの30～40年間で瀬戸大橋の完成や大型フェリーの就航といった交通面や、産業、観光開発などの面で急激な変化を遂げた地域でもあるため、現在どのような民俗事象が見られるのかについて注目する価値が十分あるといえる。とくに、当地において家々の中で祀られる荒神や神棚、村祭りの現状などを総合的に把握する調査は容易ではないが、伊勢大神楽に同行することで見聞可能になる部分が少なからずある。そうした状況から本稿では、伊勢大神楽講社に属する森本忠太夫組の小豆島での回檀に2016、2017年と2回に渡り同行することによって明らかになった、小豆島の民俗文化の現状、そして来訪者としての大神楽と地域住民の関係性やその影響について述べたい。

1-2. 伊勢大神楽の回檀とは

伊勢大神楽講社に属する各組は、年間を通じて西日本各地を廻って家々で厄祓いの獅子舞を演じており、この活動は「回檀」⁸⁾または「お祓い廻り」などと記され、内部の符牒では「コソギ（戸禊）」と呼ばれる。各組はそれぞれ古くから檀那場（回檀の領域、担当範囲）を持っており、原則として毎年決まった時期に決まった地域を訪れる。彼らは家々を一軒一軒廻り、竈神や氏神を清め、庭先で獅子舞を舞い、神社の境内などで



地図1 伊勢大神楽講社の檀那場
 (『神と旅する太夫さん⁹⁾』を参考に神野再作図)

人を集めて放下芸（曲芸）を見せる「総舞」を開いてきた。現在の講社の檀那場は2府11県（三重県・滋賀県・和歌山県・京都府・大阪府・福井県・兵庫県・岡山県・鳥取県・広島県・山口県・島根県・香川県）に及ぶ。

森本忠太夫組の檀那場と年間スケジュールを例にとれば、次のとおりである。12月31日に本拠地である三重県桑名市太夫を出発し、1月から4月は近江（滋賀県）を廻る。4月半ばには伊勢大神楽講社の全組が集まって伊勢神宮参拝を行い、5月は丹波（京都府亀岡市、南丹市）、6月から7月は備前（岡山県沿岸部）、8月から9月は瀬戸内海塩飽諸島（櫃石島、本島、広島、瀬居島¹⁰、与島、岩黒島）、10月は小豆島、直島、犬島、石島などの島々を廻ってから再び備前（岡山県）へ渡り、11月は丹波（兵庫県篠山市）を廻って12月初旬に舞納めとなり、一旦解散する。12月24日には三重県桑名市太夫の増田神社で講社の総舞に参加し、また12月31日に集結して近江へと旅立つ。

森本忠太夫組は講社のなかでは唯一、塩飽諸島や小豆島など本土を離れて瀬戸内海の島々の回檀を行っている¹¹。以前は今もよりも多くの島々を訪れていた。わかっている限りで、以前行っていた島々は牛島、手島¹²、松島、沙弥島¹³、高見島、佐柳島、六島、小与島、栗島、豊島、男木島、女木島である¹⁴。

1-3. 森本忠太夫組による小豆島回檀

森本忠太夫組は10月初旬に小豆島を訪れ、13日間かけて廻る。小豆島は現在、土庄町と小豆島町の二つの町で構成されており、森本忠太夫組はそのうちの土庄町の次の地区を檀那場としている。

渚崎地区（渚崎／大谷／上庄／北山／平木／要鉄／赤穂屋^{あこや}）

四海地区（伊喜末^{いぎすえ}／新開^{しんがい}／小江・沖之島）

土庄地区（本町／鹿島／大木戸¹⁵）

ただし、現在の回檀地域がはっきりと定まったのは昭和に入ってからのものであり、以前はより多くの地域を廻っていた。森本家に伝わる文書のうち、1760年（宝暦10）に「森本小四郎^{ひかえ}」によって書かれた「旧年代々旦家日家栄」という史料¹⁶には、近江国、丹波国、播磨国に続き、讃岐国塩飽島21ヶ村、小豆島53ヶ村を廻ると書かれている。当時小豆島全体に何ヶ村あったかは明らかではなく、おそらく大字・小字の集落名も含めて数えたものと思われるが、53ヶ村という数からは島全体にわたって廻っていたの



地図2 森本忠太夫組の土庄町内における回檀地

ではないかと推測される。

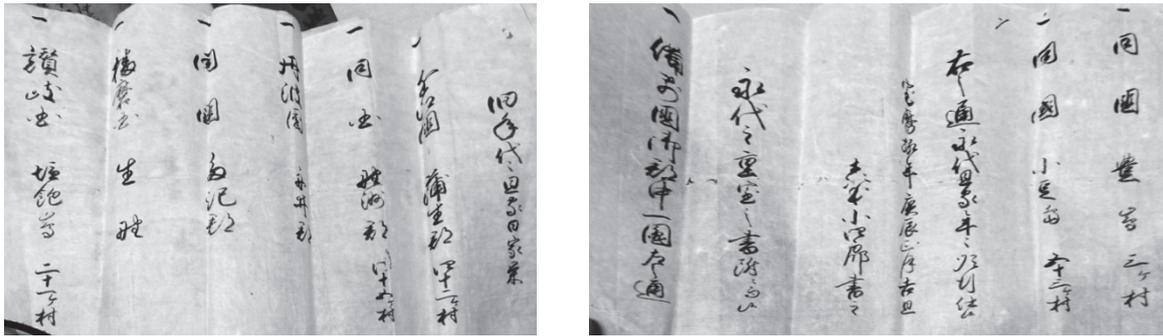


写真1 宝暦10(1760)年の文書 森本忠太夫家所蔵

一方、その約100年後となる1865(元治2)年の出納帳¹⁷⁾によれば、渚崎、池田、伊喜末、小江、長浜、琴塚、大部を廻っており、日程から察するところ島全体ではなく西部から北部の海岸と伝法川をつたって半周するような行程だったようである。明治中頃にはこれらの檀那場のうちの一部を分家の森本長太夫に譲渡した。最後の森本長太夫(令一)が亡くなり、昭和50年前後に廃業となった後、現在は講社に属さない渋谷章社中が7月から8月にかけて森本長太夫組名を名乗って廻るようになっている。森本長太夫健在の頃は、渚崎の大谷地区において忠太夫組の総舞を手伝ってもらったこともあるという¹⁸⁾。

また、森本忠太夫組は陸路ではなく海路で廻りながら「フナジョタイ(船所帯)」といって船で寝泊まりし、「オカヤド」と呼ばれる港の民家で風呂を借りたり、水や食事を得たりしていた。行く島や地域の順番は潮の流れによって決まっていたという¹⁹⁾。昭和の中頃にはフナジョタイをやめ、行く先々の村の民家や旅館(旅人宿、商人宿、遍路宿)などを宿とした²⁰⁾。小豆島では渚崎、伊喜末²¹⁾、鹿島²⁰⁾で宿をとっていたようである。しかし個人宅での宿泊もだんだんに難しくなり、車が導入されてからは渚崎の^{みたかの}三高野旅館から全て廻るようになった。現在は土庄港近くのビジネスホテルに泊まっている。他の組では、借家や持家を基点として回檀する場合が増えてきているが、森本忠太夫組では現在のところ以前からの習慣通りに旅館等を利用している。旅館と大神楽についての関係も2・3項で詳細に述べることにする。

また、滋賀県などでは、伊勢大神楽が正月に訪れるため、獅子舞といえは正月の風景となっているが、小豆島の場合は盆が過ぎ、これから秋祭りの準備をする時期にやってくるため、秋の風物詩となっている点が注目される。大神楽を迎える島の人たちからは、「(獅子が来ると)秋が来たって感じやなあ」「祭りの季節じゃなあ思う」という言葉が聞かれた。

神楽師たちの一日の行程は次のようである。まず朝7時過ぎに車で宿を出発し、その日に回檀する集落到到着すると、神棚と神楽の道具一式を入れた「長持ち」を車から降ろす。ここから獅子頭を取り出し、東の空と長持ちに向かって「朝神楽」と呼ばれる獅子の二人舞を奉納する。(神野・口絵1参照)それが終わると長持ちを引いて集落に入っていく。「初穂取り」と呼ばれる番頭役と獅子頭をかぶった神楽師が2人で先回りをする。各戸に着くとまず台所に入り竈神(三宝荒神サン、オクドサン、ドックウサンなどと呼ばれる)の清めを行う。次に座敷に上がり神棚、仏壇を清め、頼まれれば

家の井戸の水神や庭に祀られた氏神なども清める。また、獅子が家の人々の頭や、体の調子の悪いところを噛んで厄祓いを行う。たいてい家の主人は玄関先や台所の荒神棚に、米と金一封を盆などに載せて準備してある。これを「初穂」と言い、「初穂取り」はこれを納めると引き換えに神札、剣先札、神楽箸などを家の主人に渡す。そして獅子と太鼓、笛を持って後からやってくる神楽師たちに初穂料の多寡を符牒（隠語）で伝える。すると間もなく太鼓が鳴り始め「悪魔祓い」および「^{しぐるま}神来舞」と呼ばれる獅子舞を舞う。（**神野・口絵2参照**）初穂料によって、舞の型（段数）が長くなったり、二人舞になったりする。舞い終わると次の家へまた向かっていく。このように各戸でのお祓いをしていくのであるが、忌中・喪中の家は原則省き、1日に数十軒から百軒程を訪れる。

そのほかにも、村の鎮守の神社でも清めと悪魔祓いの舞を奉納する。家々を廻った後、こうした神社の境内において「総舞」（ソウマワシ、オオマワシなど²³⁾）と呼ばれる曲芸と獅子舞の奉納を行うこともある。ここでは家々での悪魔祓いとは別途に町内会や氏子衆で初穂を出すのだが、これも多寡によって規模が変わり、大きい所では剣三番叟や献燈の曲（茶碗積み）、魁曲（女形の道中）などの曲芸が見られる。元来はほとんど全ての集落において総舞を行っていたが、小豆島では現在は土庄本町の王子権現神社1箇所だけになってしまった。これについては4-1項で後述する。

1-4. 神楽師三木浩一氏について

小豆島と伊勢大神楽の関係を語るときに欠かすことのできない人物が森本忠太夫組の神楽師で土庄町渕崎在住の三木浩一氏である。引退した今も小豆島では大神楽といえば「渕崎のミキさん」が馴染みであり、先々で「ミキさんは来ないのか？」と頻繁に聞かれる。

三木浩一氏（以下、他の神楽師との混同を避けるため浩一氏と記述する）は1935（昭10）年4月22日滋賀県蒲生郡加茂町（現・近江八幡市加茂町）生まれで、旧姓は岡田である。父の岡田浩（旧姓・紀伊）は三重の人で、森本忠太夫組の神楽師として活動し、やはり回檀先である滋賀の岡田家に婿入りした。母の岡田すぎは露天商を営んで神楽の回檀に同行して菓子や玩具などを売って歩いた。すぎの母親も露天商だったという。浩一氏が13歳の時、父の浩が滋賀県竜王町岡屋で回檀中に急に倒れて亡くなった。そのため、氏は中学校へは行かず、喪が明けた4月に森本忠太夫組の番頭²⁴⁾をしていた三木辰美に引き取られ、神楽師への道を歩み始めた。京都府亀岡がその出発地だったという。このように幼い時から修行を積むことを「子飼い」と呼ぶ。浩一氏に続いて兄の岡田茂も大神楽に後から合流し、しばらく共に活動した。

30歳のとき（1965年頃）、親代わりであり師匠であった三木辰美の薦めで結婚することになった。相手は小豆島回檀の際に神楽宿としていた渕崎の「三高野旅館」（4-1項に後述）の娘である三木たま²⁵⁾で、ここへ婿入りした。年間を通じてほとんど神楽の旅に出ているが、休みのときには船に乗って小豆島の家に戻るようになった。結婚してからも小豆島を回檀する際には神楽師たちが揃って三木家で宿泊した。

浩一氏が得意とするのはなんといっても「魁曲」と呼ばれる演目である。台師の肩の上に立ち、花魁の姿に早変わりして何本もの傘を手足に持ったり、後ろ反りになる姿勢の艶やかさ、美しさを見せる芸である。幼い頃から鍛えた体で、小柄かつ安定感があったため、長年この上乗りの役を担い、伊

勢大神楽講社で最高齢の78歳になるまで演じ続けた。森本組の回檀地の先々、とくに塩飽の島々の住民たちからは「こんまい（小さい）おじさんの女形の道中がほんまにきれいやった、何とも言えない感じで、手が色っぽかったなあ」という話をほとんど毎日幾度にもわたって聞かされた。他にも、献燈の曲などの曲芸にも長けており、20~30代の一時期は安田市太夫組（昭和30年代後半に廃業）にも定期的に派遣され、芸者（曲芸師）として活躍していた。

浩一氏に塩飽諸島や小豆島での記憶を尋ねると、意外にも「悲しい思い出」だという答えが返ってきた。大神楽に入ったばかりの頃（1950年代前半）は今のよう島々への定期船があるわけではなく、夕方に淋しくなって浜に降りても逃げ帰ることができず、夜は電気も来ないのですぐに真っ暗になってしまったのが印象に残っているようであった。同じように森本忠太夫親方も「今みたいにこんな賑やかじゃなかった、ずっと淋しかった。遊ぶところもなかった。近所の人にエサのエビもらって、すぐそこ（湊崎）の防波堤で慰めに釣り糸垂らしたぐらいで。瀬居なんかだと岩の上にちょこんと座って下津井の方見て、ああ〜…（帰りたいなあ）って。地元の方々が待ってて下さってるのはわかってたわけやけど。それでも、ほんまに悲しい思い出なあ。」と語った。現代はどこへ行ってもコンビニエンスストアがあったり、宿に帰ってもスマートフォンで家族や友人との連絡が取れ、インターネットから社会を垣間見ることができる。それでも旅暮らしに孤独感やホームシックはつきものであるが、当時のそれとは比べ物にならないだろう。島々で獅子について来る子供たちと遊んだりするのが多少の慰めになったとも話していた。「子飼い」の神楽師たちは皆、多感な10~20代をそのように過ごして現在に至っているのである。

ちなみに現在は三木家に宿泊はしていないが、湊崎と伊喜末地区を廻る3日間は、三木家で昼休憩をとっている。そして、三木家でも他の家々と同じくお祓いと獅子舞奉納を行っている。2017年に玄関で獅子が舞ったときには、浩一氏は久々に笛を取り出して神来舞に合わせて吹いたり、新人の神楽師に「腹から音出せよ」などと声をかけていた。周辺地区を回檀する日は毎朝玄関先に立って、大神楽の車が通過するときに手を振りながら見送っていた。その姿からはまだまだ一緒に廻りたいがそう出来ないことへの淋しさや、甥っ子や孫のような後輩たちを応援したい心情が伝わってきた。

森本忠太夫組では三木浩一氏の他にも、山田芳一氏という同じ湊崎出身の人物が共に活動した。彼は以前、三木家の一面に住んでいたこともある仲で、浩一氏が小豆島に帰ってくるたびによく会っていて「手伝わないか」という話になったという。その後は小豆島だけでなく年間を通じて組の面々と共に過ごした。このように檀那場合流型の神楽師は森本組だけでなく他の組にも見られる。こうしたタイプの神楽師はある程度年齢がいったから仕事を覚えるため、組の中心である「芸者」「タイコウチ」と呼ばれる花形の神楽師にはなり得ないが、出身地域を廻るときに便宜を図ったり、顔や地理感覚が利くことにおいて組の助けになるのである。



写真2 魁曲で森本忠太夫親方の上に乗る三木浩一氏
犬島にて、2000年頃（在本桂子氏提供）

また現在も三木夫妻の地元ネットワークにより、今年忌中の家や、地域の地理情報などを教えてもらっており、神楽の仕事の上でも非常に助けになっているようである。浩一氏の場合のように組の親方や中心人物が回檀先の家の娘との婚姻を勧めるのは、単純に毎年訪ねていて互いの仕事ぶりや気心が知れているからというだけでなく、このような地域ネットワークとの連携を期待するためという理由も少なからずあるだろう。伊勢大神楽の人々は1年のなかでたった13日間だけこの島に滞在するため村の人々にとっては基本的には「来訪者」なのであるが、このように現地の協力者を通じて形成されるネットワークのおかげで、情報を得たり、親戚のような付き合いが可能になっているといえる。

2. 小豆島の人々の暮らしとの関わり

2-1. 水産業

本項では森本忠太夫組の回檀に同行しながら垣間見ることができた小豆島の人々の生活と、そうした島の暮らしの場を大神楽がどのように清めているのかという点について注目する。

小豆島の主な産業は農業、漁業、醤油、ごま油、素麺などの製造業、採石業などである。そのうち、採石業に関しては森本忠太夫組が行っている回檀地域では出会わなかった。主には四海の小海地区や小豆島町側に多いようである。

また、江戸時代には製塩業が盛んであった。小豆島の塩田の歴史は古く、明応6（1497）年には既にあつたことがわかっており、播州赤穂から浜子が来たため現在でも土庄に「赤穂屋」という地名が残っているほどである。延宝5（1677）年の地図には既に伝法川にかかる永代橋付近が塩浜だったと書かれているという²⁶⁾。昭和30年代の写真を見ても、土庄港の南方に広大な塩田が広がっている²⁷⁾。その当時は塩釜神社への信仰も厚かったと言われており、火を司る竈神の祓いを行う大神楽も、あちこちで竈祓いを頼まれたことであろう。土庄港付近の塩田だった場所には現在、大型ホテルや観光施設が立ち並び、山側は宅地になっている。

漁業に関しては、2017年3月末時点で漁業組合が、土庄中央・四海・北浦・内海・池田・唐櫃（豊島）の6カ所に所在している。森本忠太夫組の回檀先の中で漁業を営む家は四海の小江、沖之島に最も多く、伊喜末の新開、淵崎の大谷、土庄本町（土庄町総合会館付近）にも数軒見られた。小豆島の漁民の多くは「半農半漁」で、畑を耕作しながら時期になると沖へ出る生活だというのが、このように定着型の漁業を営むようになる前は、他の瀬戸内海沿岸地域と同じように、船上生活を続けながら移動を繰り返す海の民の末裔であるということが知られている。

大正の頃まではイワシ漁が盛んだったが獲れなくなったという。宮本常一も昭和11年の報告で「鰯網というものがほとんどなくなった、今鰯をひいているのは播磨灘に面している方だけだという。魚が滅切へってもう漁だけでは食えない。」と書いている²⁸⁾。

ほとんどの種別において漁獲量が減っているが、それでも安定的な収入が見込めるのがエビだという。10月の大神楽回檀の頃はちょうどエビ漁が盛んな時期である。エビは種類が多く、春から11月頃までにかけてクルマエビ、クロバカマ（クマエビ）、オオゾエビ（ヨシエビ）など様々な種類のエビが獲れる。エビがよく獲れた時代は、時期になると家ごとに庭に干してあるため村中がエビの香りに

なったという。もう少し過ぎて11月頃になるとゲタ（シタビラメ）が獲れる。10月にも既に庭先に干してあるのを見かけたが、小江の93歳のお年寄りによると、岡山の下津井はタコ干しが有名なのに対しこちらはゲタ干しの風景が名物で、テレビの取材もよく来たという。軒下に干してあるものとしては、テングサも見かけた。固めて酢の物のおかずにするという。その他には、昔ながらにタイを専門にする漁師もいるとのことだった。



写真3 ゲタ干しの様子
(沖之島、2017年)

2016年に伊喜末で回檀に行った家の漁師のお年寄りに「今時分はどのような魚がとれるのか」と聞くと、伊喜末八幡の祭りのときに家族で食べる「きずし」を作るため、アナゴを取りに行くのだと言っていた。アナゴは夜行性なので夜中に電気をつけてとりに行くのだが、80歳を越えているので家族に心配されていると言っていた。きずしというのは、アナゴを酢漬けにしてしめたものを押し寿司にした料理だという。長持ちするので祭りにはかかせない料理だったというが、味の好みや手間をかけた料理に対する価値観の変化により今ではあまり作る人が多くないようであった。各地域を廻りながら「祭りの日に何を作って食べるか」と尋ねたが、きずしや押し寿司よりもちらしずしの方がずっと優勢だった。

小江の漁師夫婦に聞いた話では、アナゴは以前よくとれたが「皆ハモに変わってしまった」という。ハモをミンチにして天ぷら（ヒラテンと呼ばれる）にするのだとあって奥さんがさばいているところへ大神楽がちょうど到着した。この家では、毎年のように神楽師たちにエビを分けてくれていて、2016年に行ったときも「今年は天気が悪くて、エビが少なくて干したのが無いんや」と残念そうに話しながらも、庭の釜で茹でたエビを袋一杯に渡してくれていた。

漁師の家は午前中に留守もしくは仮眠中の場合があり、神楽師たちも気を使っていた。特にエビ漁の場合は早朝に出て、午後岡山の仲買市場で荷を下ろして夕方帰ってくるので、昼間に訪ねるとほとんど留守である。昔は夫婦で船に乗る家が多く、女性は船の上でエビの選別作業を手伝ったりした。親子で乗る人も多かったが、今は男性が一人で乗る船が多いようだ。

伊勢大神楽は、家の主人が留守でも玄関に初穂料が用意してあったり隣家に言付けがある場合は獅子舞を奉納する。漁師の家では、神棚を清めるときに「家内安全」だけでなく「海上安全」も祝詞に入れている。森本忠太夫組は沿岸部の回檀地が多いため、「海上安全」の守り札も常備しており、頼まればこれも神札と一緒に渡すことがある。

瀬戸内海は一般的には穏やかなことで知られるが、島に近づくと急に潮流が激しくなるところがあり、新開地区の漁師はこれを「～～の辺りは瀬戸が凄い」と表現していた。また、沖之島の92歳の老人は網を足に引っ掛けて事故にあう危険性を考えて引退した、と言っていた。森本忠太夫親方も、以前檀那場の人で網で事故にあって亡くなったことがあったと言う。そうした水難事故を防ぎたいという気持ちや、天気や潮の加減一つで収入が大きく変わるためなんとか良い天候であってほしいという願いは昔も今も変わらず、やはり信心に結びつく傾向が強い。そのため漁に関係のある神事やまじないごとは比較的残りやすいと言えるだろう。

例えば、沖之島の「シラタキさん」と呼ばれる神社では今もサワラ漁の開始時期に合わせて神事を

行っている。以前は旧暦3月15日に行ったが、新暦だとサワラの漁期より早くなってしまうので、現在は4月20日頃に伊喜末八幡の宮司に来てもらい、神事を行っているという。サワラはこの辺りでは馴染みがあり、ご馳走として食べられてきた魚である。沖之島、小江では玄関先にサワラの尾ひれを釘で打ち付けたり、ビニールテープで貼りつけてあるものが数軒で見られた。宮本常一もこの習俗を隣の淵崎の大谷地区で見かけ、「末廣でマンがいいからつけてあるのだと言う。併し他の部落では殆ど見かけなかった」と記している²⁹⁾。前述の沖ノ島の老人にこの習慣の理由を聞くと、「魔除けだという人もいるが、漁師の家で今年これだけのサワラを獲って食べたぞと自慢するためだ」と説明していた。



写真4、5 サワラの尾ひれを玄関先に張りつける風習（いずれも沖之島、2016年）

他の水産業には、海苔養殖がある。戦後に衰退が著しかった水産業のてこ入れを目的に県水産課と地元漁協、そして富丘中学校（昭和30年に土庄町立中学校として合併）の職業科の中学生が協力して昭和28年12月より4年間かけて伝法川一帯で試験的養殖を始め、研究の成果あって昭和40年代は生産高が上がるようになった³⁰⁾。伊喜末の新開地区でも盛んに行っていたが、10年程前に海苔がボラなどの魚に食べられる「食害」や、栄養素不足による色落ちが著しくなり皆辞めたという。その頃までは毎年、新開の波止場にあるえびすの祠の前で大神楽の総舞が行われていたが、海苔養殖の中止に伴って止まってしまった。

小江にも海苔をやっている家が10軒ほどあったが、今は先に挙げた92歳の老人の家族が沖之島で唯一続けているようだ。機械のコストがかかり、色落ちなどの品質を厳しく追及されるので割りに合わないと嘆いていた。土庄本町の総合会館周辺にも何軒か海苔小屋が見られた。留守だったので話は聞けなかったが、大神楽の獅子が海苔小屋を清めている姿を見ることが出来た。森本忠太夫組が訪ねる地域の中では、小豆島からも近い石島で現在も海苔養殖が盛んである。

塩飽諸島の^{ほんじま}本島では潜水業を営む家が多く見られたが小豆島ではあまり見かけなかった。小江で建設業を営む個人宅の玄関に、潜水船のプロペラと、「カブト」と呼ばれる潜水用ヘルメットが置いてあったので聞いてみると、今はやっていないがご主人が若かった頃にタイラギ、ミル貝などの貝漁や橋の護岸工事の仕事をしていたという。小豆島にもそれなりに潜りの仕事をする人もいたがだいぶ減ったようだ。本島では潜水ヘルメットを使わないときに床の間に置いている家が見られ、岩黒島では床の間のヘルメットを獅子に噛んでもらっている姿も見かけた。貝漁にしても護岸工事にしても、

海底での潜水作業は事故の危険性や、水圧のため身体への負担が大きい。作業で使わないときは床の間に置いて神に安全を願ったのであろう。



写真6 玄関先に置かれた潜水ヘルメット
(小江、2017年)



写真7 床の間に置かれたヘルメット
(本島小阪地区、2017年)



写真8 床の間のヘルメットを清めているところ
(岩黒島、2017年)



写真9 船の祓い (大谷、2017年)

森本忠太夫組は瀬戸内海沿岸や島嶼部の漁村での回檀を行うため、船のお祓いを頼まれる機会が多い。しかし、どの地区でも漁業を営む人が減ったため船の清めを頼まれる回数も減っている。2017年の小豆島では湊崎の大谷地区で1件だけ見られた。

また前述の通り、森本忠太夫組は江戸時代から昭和初期まではフナジョタイ（船所帯）と言って船で生活しながら瀬戸内海を海路で廻った。そのため船の操業に関して、漁業や渡船業を営む人々から大きな助けを得ていた。小豆島では長年の間、湊崎大谷の漁師、田川一郎氏に船頭をお願いしてきた。田川氏の船で小豆島から犬島、石島、直島へ通い、島々を廻り終わると岡山県の穂浪まで送ってもらっていた。一郎氏の父親の松助氏の代からの付き合いであるという。一郎氏亡き後は、伊喜末の親戚の方をお願いしていたが、諸事情により2017年からは岡山県側から直島、犬島、石島に向かうよ

うにルート変更している。これまではこのように回檀先の知人のついでで渡海の便宜をはかってもらってきたが、だんだん船の都合がつかなくなって、島に渡るのが困難になる場合も出てくる可能性はある。牛島なども本島汽船が牛島に行かなくなったことで廻れなくなったという。島の人口が減って回檀先の家も減る一方で、反比例して船賃が高くなっている。長年の縁と歴史は大切にしたいものの大神楽にとっても判断が難しい問題である。

2-2. 農業および食品加工業

伊勢大神楽を迎える際、家の主人が「初穂」と言っただけでその年とれた穀物を出すのは昔からのしきたりであるが、小豆島をはじめ瀬戸内海の島嶼部や岡山県の沿岸部では米が貴重だったことの名残りもあってか、あまり米をたくさん出さないのが特徴である³¹⁾。小豆島では長らく麦、サツマイモが主な農産物であったため、大正期の初穂帳を見ると初穂にも麦が出されていたことがわかる。

森本忠太夫組が回檀する地区のなかでは、北山から上庄にかけての地区がもっとも広い農地を持っている。このあたりから田が増え始め、さらに奥へ上っていくと中山から肥土山と農村歌舞伎で有名な地域に至り、この辺は農業地帯で「千枚田」と呼ばれる階段状の水田が見られる。四海の伊喜末も戦前までは一大農村地帯だったようだが現在は宅地化しており、サツマイモ、オリーブなどの小規模栽培がされている。オリーブは明治41（1908）年から小豆島で作られ始めた作物である³²⁾。ちょうど10月2週目頃に新漬けの販売が「解禁」になるとのことで、神楽師たちの滞在期間中に宿の食卓や街中の売店に並ぶようになった。オリーブオイルや精油を練り込んだ石鹸なども土産品としても人気で、小豆島の観光に大変貢献しているようである。

小江、沖之島あたりではもともと除虫菊の栽培が盛んだったというが今はあまり見ない。

小江のお年寄りの話によれば、若い頃に山野を一生懸命耕して作った畑は、今また山に戻ってしまっているという。ここ3、4年はイノシシが海を泳いで渡ってきて、夜中にイモなどの農産物を食い荒らすため、去年、知り合いから海苔網をもらってきて畑にかけるようにしたが、あまり効果はないと嘆いておられた。瀬戸内海の島々にイノシシが渡るようになったのは1980年代後半からだと言われている³³⁾。鹿も小豆島には古くから生息しており鹿垣の歴史もあるが、もともと小江にはいなかった。それも最近では出没しているという。土庄町は最近害獣駆除に力を入れはじめ、小江にもひとり猟銃の免許を持った人がいるそうである。

また、小豆島は素麺も有名である。素麺作りはもともと農家の副業だったが現在は専門業者も多い。ただし、最近では贈り物に素麺を送るなどの需要が減ったこともあり製麺工場を畳む家も見られる。瀨崎の兼業農家の老夫婦は、自分たちの代までは、機械をフル回転させているなかで伊勢大神楽に工場を清めてもらっていたと言っていたが、2017年は機械をしまってある倉庫にむかってお祓いをしてもらっていた。息子が会社の定年になったらまた機械を動かそうと思っている、とのことであった。同じように、大谷には消防署に勤めていたが定年後に親の残した製麺の機械を活用して素麺を作っている方もいた。

ちょうど大神楽が小豆島を廻りはじめる10月1日が素麺組合の始動日で、その日に初めて製麺の機械を動かし、「寒製手延べ素麺」の製造を開始する。集落に工場があると、粉を練る過程で使われる

ごま油の独特の香りが漂い、製麺機の機械音や、扇風機の声、素麺をかけて伸ばす機はたと呼ばれる器具の高さを調整するジャッキの音などがあちこちで聞こえる。秋の青空のもと真っ白く細い素麺が機にかけられており、これを字のごとく手作業で忙しそうに「箸分け」する姿や、出荷用の木箱が積み上げられた脇で、獅子舞を舞う風景が見られる。神楽にとっても、素麺屋にとっても仕事をするのは天気が重要で、晴天の日は本当に貴重だと言っていた。そうして出来上がった小豆島の素麺は、神楽師の宿の食卓にも並ぶ。噛むとプツリと切れる弾力と歯ざわりが特徴的であった。

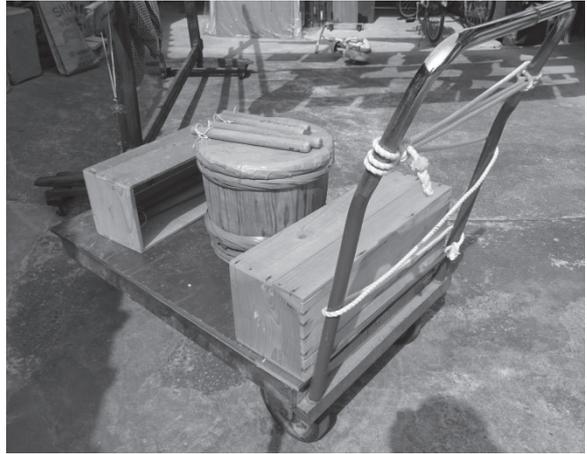


写真10 椅子を素麺箱、太鼓を醤油樽で作った練習用太鼓台（大谷H製麺、2017年）

また小豆島では醤油製造が盛んだったため戦後は佃煮の加工業が盛んになった。上庄の昆布佃煮工場でも獅子舞を舞う姿が見られた。昆布の評判が良いので、神楽師たちも小豆島土産に買って他所の得意先や神楽師の家族に配っているようであった。

2-3. 旅館業、その他の産業

農漁業の他の商売で、大神楽に関係が深いのは旅館である。小豆島には島四国といって八十八カ所の霊場がある。四国八十八カ所の巡礼を果たせない者にも手軽に一周できるようにと、貞享3（1686）年に真言宗の僧侶が協同して小豆郡中にある霊場に順番をつけたものであるという³⁴。そのため、島内には各所に遍路宿があったが、貸切バスでの巡礼が増えたこともあってその数は減り、一部は他の観光客に合わせて観光旅館に変化していった。

1-4項に述べた通り、森本忠太夫組が昭和期に長きにわたって宿泊していたのは瀨崎の「三高野旅館」であるが、ここも元は遍路宿のひとつであった。土庄本町の中心街から瀨崎にかけてはこのように遍路宿が多かったという。瀨崎の辺りは草相撲が盛んであったため、三木家の先祖の四股名「三高野」が屋号になった。旅館の目の前は瀨崎の港で、土庄とは船で往来した。旅館を切り盛りしていた祖母のことを記憶している三木たみ氏によれば、旅人が多かった戦前には、たくさんの芸者をあげて大宴会をするような大きな宿で、祖母本人も三味線や舞踊の腕で右に出るものではなく、弟子も大勢とっていたと言う。軒先でうどんも売っていて、これがお遍路さんや、向かいの製材所に入出入りする労働者たちに人気だったという。三高野旅館が店仕舞いをした後も、そのまま三木家が大神楽の宿をつとめ、たみと神楽師の浩一が結婚してからも長らく三木家に宿泊した。

これも難しくなった2000年代前半に、同じ瀨崎にある「八千代旅館」を紹介してもらい、7、8年ほど泊まったという。八千代はもともと料亭として営業していた店である。現在は廃業しているが伝法川沿いに佇む風情ある建物は残されている。併設の八千代別館というカフェでも洋食や喫茶などを出し、島では非常に珍しいモダンな建築として名物であったという。現在のショッピングセンター「オリーブタウン」のあたりに東洋紡績株式会社が工場を構えていたことや、戦時中もここが軍部

の要地になっていたこと、そして永代橋のすぐ脇に「娯楽の殿堂」と呼ばれた劇場「延齡閣」で歌舞伎や大衆演劇、歌謡ショーなど様々な興行が催されたこともあり、八千代旅館の辺りから赤穂屋、永代橋にかけてのエリアは料亭や商店の立ち並ぶ土庄の一大繁華街として栄えていた。戦前の最盛期に、近くの三高野旅館に泊まっていた神楽師たちも家廻りを終えた夜にこのあたりに一杯飲みに来ていたのではないだろうかと思像される。八千代旅館が2015年に閉まってからは、土庄港近くのビジネスホテルを利用している。こうした大神楽の宿の移り変わりもまた、小豆島の産業や観光業の変遷を示しているといえよう。

3. 小豆島の民俗信仰との関わり

3-1. 伊勢大神楽が清める家々の神

本項では、伊勢大神楽が家々を廻り清める際に対象とする神々を記しておく。

家を訪ねるとまず第一に清めるのが「カマド」である。火は人がものを食べて生きるために最も重要であり、火を起こすカマドは家そのものの象徴でもある。瀬戸内ではカマドの火を司る神を「三宝荒神サン」「オクドサン」「ドクウサン」などと呼んで祀り、家族の無病息災を祈る信仰が根強く生きている。大神楽を迎える家では荒神棚のロウソクや電気を灯して待っている。神楽師は「はらいたまえきよめため、竈の神はホムスビの神、オクツヒコ、オクツヒメの神、悪事災難来たらんよう、祓い賜え清め賜え」などの祝詞を唱え、獅子が御幣と鈴を振って荒神棚を清める。

伊勢大神楽が長期間をかけて廻る滋賀県の農村部などでは、家を改築してもなお土間を残し、古いカマドを守っている家がたびたび見られるが、小豆島ではほとんど見られなかった。2017年には小江で一軒だけ古い土づくりのカマドを清めるところが見られた。しかし、この家も現在は人が住んでいない状況であり、いつ取り壊されるかわからない。旧式のカマドがあまり見られない代わりに、新築や改築した家の場合でも、大神楽が台所まで上がるような家³⁵⁾では、荒神棚を設け、神札を納め、燭台や柵立(松葉、柵)などを置いているところが多く見られた。新式キッチンでの荒神棚の設置場所としては、最も多いのが冷蔵庫の上や脇で、他には流しの後ろの窓辺や、上の食器棚の戸を一部取り払って神棚にしている家などもよく見かけた。しっかりした木製の神棚を設けている家も少なくなかった。このように小豆島では古いカマドの構造そのものを残すことよりも、その精神性を守ることが重視されているようであった。

四国各地や瀬戸内海島嶼部ではカマドに対する信仰が強く、これを清める門付け芸能者も比較的現代にいたるまで多かったはずだが、土間や古いカマドを残してこなかった事情については今後の検討課題である。

また、調査中は神棚に納められた神札まで細かく確認することは出来なかったが、小豆島各地域の八幡神社(伊喜末八幡、土庄八幡、富岡八幡等)や伊勢神宮、石鎚神社のものが多いうようであった。伊勢大神楽の神札と剣先札はともに荒神棚に上げられることを想定して配られているが、土地によっては玄関に貼ることを習慣にしているところもあり、小豆島でも玄関口や門柱、勝手口の木戸に貼っている家を見かけた。



写真11 土造りのカマドの荒神棚 (小江、2017年)



写真12 新式キッチン荒神棚 (伊喜末、2017年)



写真13 「石鎚神社崇敬の家」の札と大神楽の神札 (大谷、2017年)



写真14 四国霊場第6番安楽寺の札と大神楽の札 (伊喜末、2017年)



写真15 もともと井戸だった場所の水神祓い (伊喜末、2016年)



写真16 井戸のポンプ脇に水神が祀られる様子 (伊喜末、2016年)



写真17 氏神の清め（上庄、2017年）



写真18 氏神の清め（北山、2016年）

また、小豆島では今も地下水を使っており、庭の電動汲上げポンプの脇にも榎や松葉が供えられている姿が多く見られた。伊喜末のある家では、もともと井戸だった場所に台所を増築をして塞いでしまったため、室内ではあるが、もともと井戸のあった場所を踏まないようにと一段高くして水神の祭壇を設けていた。この家ではカマド神の清めと同時に水神も清めていた。

他にも、大神楽は頼まれれば庭や畑のなかに祀ってある氏神もお祓いするようにしている。中には、家の氏神と集落の鎮守社の中間の規模を持つようなものも見られた。

3-2. 土庄町各地の寺社、祠

伊勢大神楽は家々を清めるだけでなく集落の鎮守の社にも参って清めたり、獅子舞（神来舞）を奉納したりする。これは大抵の場合、氏子衆や町内会、もしくは個人で社の世話役をしている人から毎年頼まれて、家の初穂とは別途に初穂を受け取っている。土庄でも昔は自治区、集落ごとにいくつもの神社や祠があり、ほとんどその全てを廻って清めていたが現在は行く神社は限られている。

2017年に清めに行ったのは、瀨崎大谷荒神社、沖之島白瀧神社、北山荒神社、土庄白滝神社、土庄愛敬神社（オシメサン）、土庄王子権現神社などであった。（次頁写真19～25を参照）

2016年から2017年にかけても、行っていたところに行かなくなった場所もある。他の島だが、たとえば櫃石島では昔宿をしてもらっていた家のすぐそばにあるエビス祠も昔は清めていたが今は世話する人がいなくなったから上がっていない、と崩れ果てた祠の前を通りすぎていたのが非常に印象的であった。地域の人による神々への信仰が廃れるとともにこうしてその神々と大神楽との関係が無くなり、その土地とも疎遠になっていくのであった。

また以前は神社の清めとともにその境内において小規模の総舞を催す場合がほとんどであった。以前総舞をやっていた所は、大谷荒神社、瀨崎浄源坊、伊喜末新開波止場（エビス祠前）、小江波止場（エビス祠前）、北山荒神社（後に宝生院で数回）、上庄荒神社、赤穂屋交差点（うどん店川崎屋前）、土庄金比羅神社、土庄愛宕神社、土庄愛敬神社（オシメサン）、土庄天神神社、大木戸八幡神社、鹿島明神社などである。他にイレギュラーで行われた所としては、伊喜末の高良神社（個人による再

建を記念に平成12年頃総舞開催)、土庄八幡神社（一度だけ例祭の宵宮で頼まれて総舞を開催、開催年不詳）が挙げられる。

一方、現在も小規模ながら総舞を行っているのは土庄本町の王子権現神社のみである。これについては第41項にて述べる。9月に5日間かけて廻る塩飽諸島の本島に比べると、小豆島土庄町の檀那場のほうがはるかに大規模であるが³⁶⁾、本島には総舞が4箇所残っているのに対し、小豆島は王子権現の1箇所しかない。理由は、小豆島では第一次産業離れや観光ブームなどのため都市化が早かったためということもあるだろう。大神楽を迎える風習だけでなく、盆踊りなどの年中行事の多くが失われ、秋祭りのみが盛んである。また、森本忠太夫親方によれば、小豆島の神社では氏子衆よりも有志の世話人たちの力によって伊勢大神楽の総舞を開催していたところが多かったといい、世話人の人々のおかげで伊勢大神楽の奉納が長年続けられた一方で、その個人が亡くなったり都合がつかなくなると次世代へ継承されずに総舞が無くなるケースが多いようである³⁷⁾。

集落のほうから総舞の中止を申し出る理由の多くは、開催費用に関する経済的問題よりも、高齢化が原因で「見に行く人がいない」「足が悪くてお宮さんに登れない」ということであった。以前は娯楽が少なかったことや、農漁業・地元産業に従事する人が多かったため、平日に総舞を開催してもたくさんの方が来た。また子供たちも多かった。しかし現在は高齢者ばかりで、総舞を開いたところでもなかなか見に来れないという。現在清めの獅子舞だけを奉納しに行っている上庄地区の荒神社で自治会長から聞いた話では、お年寄りが登れないので自治会の資金を投入して階段を設置したとのことであった。また、同地区では神社の世話役の負担を少しでも減らそうということで、これまで代表が一人（一軒）で引き受けていた仕事を数軒ずつのグループで担うようにし、これも夏祭りの時期に毎回同じグループが当たらないようローテーションの組み方に工夫をこらしているという。高齢化と共に神社への奉仕が単なる負担に変わってしまった現実、それでもそうした習慣を残そうとする執念や努力が見受けられた。



写真19 土庄愛敬神社（オシメサン）2017年



写真20 上庄荒神社 2017年



写真21 北山荒神社 2017年



写真22 土庄白姫大明神(シラタキさん)神社2017年



写真23 沖之島白瀧神社2016年



写真24 渚崎愛宕神社2016年



写真25 伊喜末新開えびす祠2016年

3-3. 伊勢大神楽に対する信仰の特徴

伊勢大神楽に対する小豆島の人々の信仰には、次のような特徴があるといえる。

ひとつには、伊勢からの物理的・心理的距離が遠く、海を挟んだ島国であるということもあり、「伊勢」に対する憧れや信仰が近畿地方に比べ強いという点が挙げられる。小豆島はもともと伊勢講も盛んであった。水野一典（羽床住人）によれば、渚崎であるおばあさんが「獅子はわざわざ伊勢からきてくれるのだから、（お伊勢さん本体よりも）獅子のほうがもっと有難い」と話していたという。大神楽の存在意義として、伊勢から来ることが非常に重視されていることがよく表れている。また伊喜末のおばあさんが、他の人に大神楽の獅子舞を見るのを勧めるのに「伊勢の風に吹かれんか」と誘ったというエピソードも印象的であり、これもまた大神楽の獅子に対して、伊勢神宮への属性、その神聖性を付与しているために出た言葉だったと言えるだろう³⁸⁾。

また、筆者が2016年に伊喜末で出会った90代の女性は、「台風で天気が悪いから来られんかと思って心配してまいったんですよ、獅子が来るんでうちへおるんじゃいうてどこも行かんで…」と声を震わせて言っていた。島には船で来なければならず、天気次第では予定通りに巡業が進まない。島の人々も遠くからの往來が非常に難儀であることを知っているがために、神楽師たちへの心配、同情、有難さが増していると言えるだろう。

このように瀬戸内海の人々の漠然とした「伊勢からやって来る」ことへの信仰がなお健在であるこ

とを示してくれるエピソードとしては、床の間にかける伊勢神宮の掛け軸を買って来て欲しいと神楽師に依頼している人を見かけたことだった（与島、2017年）。森本忠太夫組の神楽師たちはそれぞれ三重県桑名市や四日市市、滋賀県などに居住しており、しかも普段ほとんど旅回りの生活をしているため神宮に掛け軸を買いに行くのは実は困難なのだが、それでも住民の方たちが「お伊勢さんのお使い」である（と信じている）神楽師たちに買ってきてもらうことを望み、それに価値を感じていることを尊重し、その願いに応じて住所の書かれたメモを受け取るのであった。

同時に島の人たちの多くは、神楽師たちが「伊勢から来ている」ということ以外には、どのような生活をしているのか詳しい情報を持たないことがほとんどである。伊喜末の新開地区で年配の女性が「ところで、一年になんぼ廻ってはるのか、（旅の）間には何しよるんか、田んぼや畑はしよらんのか」と聞いてきた。その言葉からは、彼らにとって「仕事」といえば海に出て漁をし、田畑を耕すことなのであり、大神楽を職業としていることに対する新鮮な驚きを感じられた。毎年来てくれる有難い伊勢の獅子としての認識や信仰はあるが、彼らが365日中300日近くを広範囲に旅して過ごしている専門集団であるということは知らない人が多いのである。

これらのことが島独特の信仰的特徴だといえるが、他の地域とも共通することとしては獅子に頭や体の悪いところを噛んでもらう行為が挙げられる。小豆島でも、幼い子を持つ若い母親や、足腰に不自由を感じるおばあさんたちは特に進んでかんでもらおうとする姿が見られた。

また、獅子のたてがみの部分につけられた和紙の部分を「幣」と呼ぶが、これをもらうと健康になる、頭に貼っておくと頭痛が治る、牛に食べさせる、井戸に入れておく、財布に入れておくなどの事例が先行研究に書かれており³⁹⁾、小豆島でも幣を所望する人々に何度も出会った。先述の伊喜末の90代の女性は、2センチ四方ぐらいの小さな和紙のかけらを両手で持って深々とお辞儀し、恍惚とした表情で獅子を見送っていた。

また、上庄地区には毎年必ず荒神棚に上げるための小型の幣束を作ってほしいと頼まれる家が2、3軒あり、2016年には神楽師が長持ちから道具を取り出して道端で幣束を折る姿が見られた。これは他の地域でもあまり例を見ないイレギュラーな依頼であるが、神楽師たちは可能な限りこうした願いにも対応してきた。しかし翌年に行くと、毎年神楽を迎えていたおばあさんが入院中で、その子息は幣束を頼まなかった。長い間の習俗が個人の不在によって唐突に終わりを迎える瞬間を目の当たりにしたのであった。

また、森本忠太夫組では前述の通り、「先番」と「後番」で前後2組にわかれ、先番が受け取った初穂料を確認し、後番がこれに見合った舞を奉納する。2組の距離が離れる場合には、先番が初穂料に見合った舞の型を表す和紙を玄関先の釘などに結んで指示する（これを「紙付け」という）。後番はこの紙をちぎり取りながら舞を始めるが、結んであった紙繕りの部分は残る。神楽師によれば、この紙繕りを1年間外さずにとっておく人もいるそうだ。小豆島で出会ったあるお年寄りも、この釘にかけてほしいと場所の指定までしていた。このように、本来神楽師にとっては内部のやりとりなどのための道具であり信仰的意味を持たぬものであっても、村人が神聖視している場合が多々ある。

その他に小豆島における信仰の特色としては、当地に島四国の霊場が多数存在し、お遍路さんへの「お接待」の文化があることが挙げられる。巡礼地には、私財をなげうってでも、行者たちに飲食や

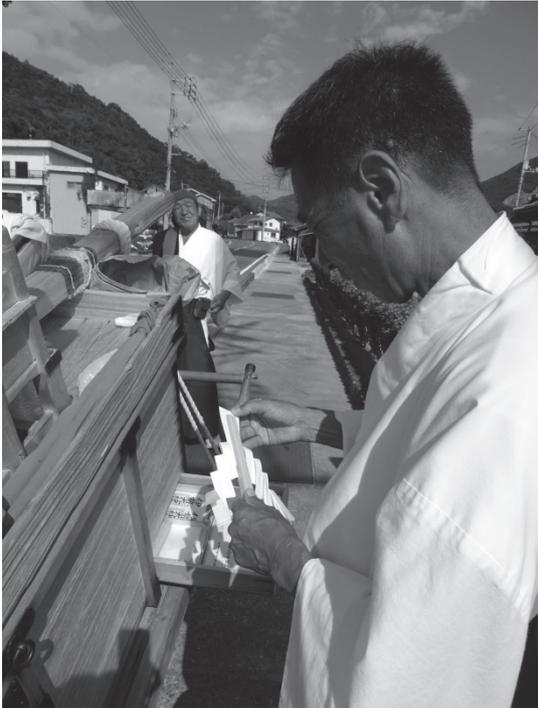


写真26 荒神棚用の幣束を頼まれて折る神楽師
(上庄、2016年)



写真27 紙付けの例

宿泊場所などを提供することが、神仏の力を分けてもらい、功德を積むことにつながると考える価値観を持つ人びとがいる。そうした考え方が大神楽にも適用され、彼らを手厚く迎える風習とつながっていると見えるだろう。「エライ（大変）なあ、ご苦労じゃなあ」と、10月とはいえ暑い小豆島を廻る神楽師たちを見守る村人たちの目には、お遍路さんたちの姿が重なって映っているのかもしれない。塩飽諸島の広島にも島四国があり、毎年神楽師たちにお茶とお菓子をもてなしている石材屋の夫婦から話を聞くと、やはり遍路の接待も長年熱心に担っている家であった。

4. 小豆島の祭り・民俗芸能との関わり

4-1. 土庄町王子権現・住吉神社の獅子頭と芝居舞台

ここでは、現在森本忠太夫組が小豆島で唯一の総舞を行っている王子権現神社について述べる。王子権現神社では、10月9日の例祭の日に曲芸と獅子舞が披露される。また、当神社は王子地区の対岸に浮かぶ小島「あずき島」に鎮座する住吉神社の拝所も兼ねている。そのため、少しややこしくなるが、7月（旧暦6月31日、現在は7月最終日曜日）には同境内で住吉神社の祭礼も行っていることを先に述べておきたい。

今回は10月8日（王子権現神社の例祭前日）、および9日（祭礼当日）に王子権現の世話人代表の山本寛一氏からお話を伺うことができた。山本氏によると、同境内で7月に行われる住吉神社の例祭では、もともと船に神輿を積んで住吉神社のご神体を迎えにあずき島まで行き、ご神体を王子権現神社に遷した後に町内を練り歩くのだが、この際に獅子も共に行列したのだという。この祭りは一旦途絶えた後平成に復活を遂げたが、このときに獅子頭を持っていなかったため、近隣の天神神社にあっ

た獅子頭⁴⁰を借りて行わなければならない状況だった。当時氏子総代であった父の山本良熙氏が、高松の職人に新調を頼むと高くつくため手が出ない、と嘆くのを聞いて森本忠太夫親方が自身の厄年(61歳とすれば2000年頃か)であったこともあり、伊勢大神楽の獅子頭を見繕って奉納したという⁴¹。

山本氏によれば祭礼では現在も村の青年が伊勢大神楽の獅子頭を用いて門付けを行っているといい、その写真も提供して頂いた。法被を着た青年が獅子頭をかぶって家々を廻る様子、猿田彦(天狗)面をかぶって擦りごさらを手を持った先行きの様子も見られる。



写真28、29 住吉神社の祭礼に伊勢大神楽の獅子頭を持って家々を廻る青年団(山本氏提供、撮影年度未詳)



写真30 王子権現神社に保管されている地元の獅子頭(左)、森本忠太夫が寄贈した獅子頭(右)

見たところ王子権現神社に保管されていた獅子頭は讃岐の張り子製の唐獅子で、木彫りの伊勢大神楽の獅子頭とは使い勝手がだいぶ違うように思われたが、実際に住吉神社の夏祭りで獅子役を担う方に話を聞くことがなかったので、また今後調査を重ねて論じることとしたい。

ここでは2017年に調査することができた10月9日の王子権現神社例祭の次第を記しておく。祭礼前日の10月8日には、山本氏を中心とする地域の世話人の方々が翌日の祭礼に向けて本殿の階段下に幟を上げ、ぜんざいなど接待の準備を行っていた。10月9日は15時に大木戸八幡神社の宮司が来て神事を執り行い、15時45分頃に伊勢大神楽が現地に到着、コミュニティセンターに上がってぜんざいの接待を受けた。16時10分頃には本殿を清めた後、山本氏が開会の辞を述べ、40分ほどにわたって総舞を開いた。演目は、四方の舞、水の曲、神来舞が披露された。本来は地域の人々に「女形の道中」と呼ばれ親しまれる魁曲も含まれる予定だったが新人稽古中につき演じず、その代わりに水の曲を演じたとのことであった。観客は35人程度集まり、祝日とあって子供も6人程度いた。(神野・口絵3、4参照)



写真31 王子権現神社本殿を清める様子

また、王子権現神社にはもともと芝居舞台があり、明治大正期にはさかんに芝居が行われ、遷宮（王子権現神社の改修工事か）記念に奉納された歌舞伎の演目が書かれた記録が本殿に掲げられている。

小豆島と言えば農村歌舞伎が盛んだったことで有名であり、現在でも肥土山、中山の歌舞伎は盛大に行われている。以前は小豆島には30以上の常設舞台があったというから驚きだ⁴²⁾。そうした農村の芝居と伊勢大神楽が直接的に関わった事例はまだ聞いていないが、いくつかの側面で接点が見受けられるのでここに述べておきたい。

ひとつには、歌舞伎舞台と大神楽の接点である。大神楽の総舞にはバチを空高く放ったり、長い棹を何本も継いでその上で茶碗や皿を回すなど、高さを競う曲芸があるため基本的には野外で行われ、天井のある舞台上で上演されることはめ

ったにない。しかし農村歌舞伎の常設小屋の場合、たいてい神社境内に位置しているため、ときには舞台や客席の構造を用いて総舞を行う可能性がある。今回調査した王子権現神社がその事例のひとつだと言える。本殿の向かいにある「土庄王子コミュニティセンター」は新しい建物であるが、もともとこの位置に舞台があり、本殿との間の地面に敷席を設けて芝居を奉納したという。現在のコミュニティセンターの本殿側の窓にはコンクリートの張り出しが設けられている。7月の住吉神社祭礼の際に、窓を取り外して舞台のようにして出し物を演じられるように、わざとこのように建築したとのことである。大神楽の奉納はこの張り出しを背にして地面の上で行われたが、観客との位置関係上は祭礼の時の芝居と同じであろう。舞台があった頃も、地域の人々が夏の祭礼のときに余興を楽しむのと同じ環境で大神楽の奉納を観覧したのだらうということが感じられた。



写真32 神社前のコミュニティセンターで接待の準備をする女性たち



写真33 総舞の様子（水の曲）



写真34 明治43年の遷宮記念歌舞伎の記録、王子神社本殿内

大神楽が歌舞伎舞台と出会う他の事例としては、塩飽諸島本島の泊^{とまり}地区の木鳥神社境内に残る「千歳座」が挙げられる。2012年頃、大雨のため急きょ舞台を開けて総舞の演舞をしたといい、高さに制限があるため「剣三番叟」を見せたという⁴³⁾。本島には他にも笠島地区の尾上神社に「尾上座」があったが現存しない。ここでも同じように本殿下に位置する舞台の前広場で今でも大神楽が総舞を行っている。

また上演環境の問題に加え、こうした農村舞台を活用して興行を行う職業的劇団と伊勢大神楽との間にも共通性があると言える。小豆島では島内の地芝居がセミプロ化し他地域へ出向くケースも多かったが、播州や淡路などから歌舞伎や人形まわしの劇団が頻繁に訪れていたようである⁴⁴⁾。遠くか



写真35 獅子の後方にコンクリートの張り出しが見える



写真36 本島木鳥神社千歳座（2017年）自治会と神楽師の方々の協力を得て舞台を開けて頂いた。

ら船に乗ってわざわざ訪ねて来る芸能者たちへの島の人々のまなざしは、伊勢大神楽へのまなざしと近いものがあつたのではないかと推測される。

芸能史研究者の守屋毅も瀬戸内の旅芸人たちによる「打ち込み芝居」に注目している⁴⁵⁾。守屋が引用している旅役者の中村福円の証言によれば、巡業当時は船に一切の道具を積みこんで「船所帯」をしながら瀬戸内の浜から浜を廻り、浜へ近づくとドーン、ドーンと太鼓を打ち鳴らして島の人々に到着を知らせたと言ひ、そのためこれを「打ち込み芝居」と呼んだという。事前に話し合いがあるわけではなく突然訪問するので、区長らと話してうまくまとまれば上陸してその村で芝居を打つことになるという。漁師は縁起をかつぐのをこれを追い出すことを嫌い、少なくとも浜で三番叟だけでも演じてもらうようにしたという。阿波や淡路の人形座も同じように船で生活しながら巡業した、とある。伊勢大神楽とこれらの集団の間には、事前の約束事の有無や宗教性の濃さにおいて差異があるものの、船所帯の生活や、上陸の際に太鼓を叩くなどの風俗において共通性が見出される。現在も伊勢大神楽は島々を訪れる際には船の上から笛太鼓を囃しながら上陸しているのである。

また、郡司正勝は豊島の家浦にも以前春のイカ曳きの頃に淡路から「打ち込み芝居」がやってきて、豊島の八幡神社にあった舞台でえびす回しをした後、問屋がでく芝居を「買い切って」出した、と述べている⁴⁶⁾。現在は行かなくなってしまったが、森本忠太夫組も昭和中頃まではこの家浦を回壇していたので、八幡神社でも総舞を行っていたはずである。大神楽内部の符牒で、規模の大きい総舞のことを「カイキリ」とも言うのだが、おそらくこの「買い切り」から来た言葉であろう。このように地域の豪農や漁師、商家などの有力者らが縁起を担ぎ、芸能者を丸一日買い切って長時間にわたり芝居や芸能を上演させ、これを地域住民に提供して喜ばれることでさらに地域での影響力を高めたという構造が垣間見られる。

現在の伊勢大神楽講社は自らの宗教的性格を重視し、芸能者ではなく宗教者としての在り方を強調しているが⁴⁷⁾、その他の巡業芸能者達が活発に活動していた頃は、互いに行動様式が極めて似通った団体が同時に瀬戸内海の其処彼処で、縦横無尽に行き来していたのだろうと考えられる。このように、無類の芝居好きの人々が小豆島などの島々において多くの歌舞伎舞台を残し、現在でもその環境や、村人たちとの関係性のなかで伊勢大神楽の演舞が行われているという点は注目すべきだといえるだろう。

4-2. 小豆島の秋祭りとの関連

森本忠太夫組が土庄町を廻る10月初旬は、まさに秋祭りの準備期間中である⁴⁸⁾。本稿のはじめに述べたように、土庄の人々には獅子舞に家を清めてもらおうと、いざ祭りの時期だという感覚があるという。10月1日頃から土庄の各集落の広場には格納庫から出された太鼓台が置かれる。赤穂屋で回壇中には、幼稚園の「子ども神輿」ともすれ違った。夜には各地区で子どもたちによる太鼓の練習が始まり、神楽師たちが泊まる土庄港近くのビジネスホテルにまで大太鼓の重低音や、伊勢音頭⁴⁹⁾のカセットテープ音源が聞こえていた。小豆島は昔から子ども組や若者組の力が強く、昭和期にはこれが青年団、消防分団として再編成され今でも各地域の祭りの中心を担っている。小江の「剛志社」、赤穂屋の「立信社」などが有名である。太鼓台を担ぐ若者たちや、太鼓台に乗る小学生、中学生を持つ親た

ちはこの時期になると落ち着かなくなるといい、祭り当日には大学や就職で島を出た人々もたくさん帰ってくる。島で商売をする人々も、支払いの締切りや品物の納期などを祭りの前に済ませたり、後に見送ったりと、祭りの日を盆や正月のようにひとつの区切りにしているという。

一方、森本忠太夫組は10月13日、土庄町の祭りの皮切りとなる伊喜末八幡神社の祭礼の当日に小豆島を去り、次の回壇地へと向かってしまう。その日に島を出る理由について森本忠太夫親方は、祭りの日には地域の方たちも出かけてしまうため、訪ねる側も迎える側も都合が悪いので避けているのだと説明している。その点では、土庄町の祭礼と伊勢大神楽には大きな関係がないのは確かであり、伊勢大神楽が小豆島の祭りに与えた影響などについてはこれまで注目されてこなかったのは致し方ない。

しかし森本忠太夫親方によれば、数年前に一度だけ10月13日の土庄八幡神社の宵宮において総舞を頼まれたことがあり、四方の舞や水の曲といった曲芸と獅子舞を1時間ほど披露したことがあるという⁵⁰⁾。太鼓台奉納を翌日に控え、祭りの熱気にあふれる地域住民たちが、強い関心を注いで観覧したであろうことが想像される。筆者はこのように祭ごとは何らかのきっかけで接触し、直接的でないとしても相互に影響を与え、流動的に変化する可能性があり、そこが面白いところだと考えている。その事例をひとつここに紹介する。

2017年の伊喜末地区回壇中に、男性がスマートフォンを片手に神楽師たちに声をかけてきた。「ちょっとこれ見て、去年獅子舞の写真撮らしてもらって、小海の太鼓台に獅子頭を作って飾ったんやけど、出来が良かったんで見てほしかったんや」という。男性が住む小海地区は、毎年10月13日の伊喜末八幡神社例祭において地区の太鼓台の屋根に発泡スチロールなどで作った造形物を載せる「つくり太鼓」（地元では「山車」と言う）の奉納を伝統にしており、昨年は自身がつくり太鼓の担当で、何を題材にするか考えていたときに神楽師と出会い、写真を撮らせてもらってこれをモチーフにしたという。その年のつくりものの準備は9月末頃からはじめ、他の人に知られないようにひそかに作り、他地区と競い合うものなのだそう⁵¹⁾。

筆者はその数日後、伊喜末八幡神社の祭礼に行き男性と再会し、獅子のつくり太鼓の写真と動画を提供してもらった。獅子頭のおごの部分が開閉するようになっており、太鼓台を上下に揺らすと獅子が動くしくみは面白いもので、好評を得たという。

ちなみに、2017年のモチーフは金の鯨と、熊本の震災復興を願ったご当地キャラクター「くまもん」を組み合わせたものであった。このように、毎年そのときの流行や時事にちなんだキャラクターや人物、干支の動物などが一般的なモチーフのようである。

このつくり太鼓の風習は小豆島でも伊喜末八幡以外には例を見ず、以前は何台ものつくり太鼓が並んだというのが2017年現在は小海地区にしか伝えられていない。2016年までは滝宮地区も守ってきたが2017年の伊喜末八幡では布団太鼓に代わっていた。他にも長浜地区も近年までつくり太鼓の伝統があった。

「小豆郡の民俗聞き取り集」によると、小海の歴代モチーフはわかる限りでは以下の通りだという。



写真37 2016年 小海地区制作の山車（つくり太鼓）
写真提供：小海御嶽会



写真38 小海地区の獅子と滝宮地区の本田圭祐サッカー日本代表選手（写真提供：小海御嶽会）

昭和初期 「かえる」「うさぎ」「扇子」など

昭和7・8年 祭りが中止ということで、全然準備していない所へ急に開催が決定してあわてて「にわか」を造ったが好評だった

戦時中「戦闘機」「軍旗を組み合わせてたもの」「肉弾三勇士」など

昭和23年「福助」

昭和26年 講和条約を記念して「日米国旗を組む」

昭和30年前後 「金太郎」南極観測記念「ペンギン」、「福助」「蛙」など

昭和40年前後 東京五輪で「国旗と五輪旗」、「くま」「豚」「パンダ」

昭和50年前後 「弁天さん」「福祿寿」「七福神」「恵比寿さん」

平成13年の復活後 「田中真紀子」を造り滝宮の「小泉純一郎」と張り合った「えびすさん」、18年ぶりの阪神優勝で「トラッキー君」

一方、滝宮地区は以下の通りである。

昭和初期 うさぎ、猿、犬などその年の干支が多い

昭和10年代 恵比寿さんと鯛などめでたいもの

昭和28年 権兵衛が種蒔く

昭和29年 唐獅子

昭和30年前半 サンタクロース、花さかじいさんなど童話がらみのもの

昭和40年前後 休み

昭和50年前半 二見浦、農機具、コマーシャルにつながるもの

昭和50年後半 徳利がらみ、コマーシャルなど

昭和60年前半 弁慶、伊達正宗など大河ドラマがらみ

平成元年 水戸黄門

平成2年 牛
 平成3年 羊
 平成4年 浦島太郎
 平成5年 オリーブ君（北四国国体のマスコット）
 平成6年 土佐犬
 平成7年 イチロー（プロ野球の人気選手）
 平成8年 寅さん（映画の人気者）
 平成9年 牛
 平成10年 ピカチュウ（人気漫画の主人公）
 平成11年 桃太郎
 平成12年 田村亮子（世界一の柔道選手）
 平成13年 小泉純一郎
 平成15年～18年 牛が4年間続く

滝宮の歴代モチーフを見ると、昭和29年に「唐獅子」とある。ここから、獅子が既に以前主題として扱われていたことがわかった。そこでさらに「保存版小豆島・豊島今昔写真帖」を調べて見ると、「伊喜末八幡神社の秋祭り（土庄町・昭和30年代）」と題された写真（148頁）に、まさしく伊勢大神楽の獅子が太鼓台の上に載った姿が発見された。三つ巴らしき紋が前幕に描かれ、頭はまさに大神楽の唐獅子の顔で、背中に白黒の縞模様が入っており大変写実的である。

他の太鼓台に羊、ひょうたんと梅の花のようなもの、そしてペンギンのつくりものが一緒に写っていることから、小海で昭和30年前後に南極観測記念にペンギンを作ったという記録と一致する。よって、これが29年に作られた滝宮の「唐獅子」なのではないかと推測される。

2017年に小海の男性から話を聞いた際、伊勢大神楽の獅子頭を主題に選んだ理由をはっきりとは聞かなかったが、

このように昭和期に前例がある主題であったようである。この一件からは、伊勢大神楽の獅子が小豆島の人々にとってそれだけ特別で、祝祭的なイメージがありながら、親しみを持てる存在であったことが明らかになった。

このように祭りで登場する造形物に見られる伊勢大神楽の影響に関しては、森田玲による報告がある⁵²⁾。伊勢大神楽の回壇地域である大阪南部泉州^{だんじり}州で地車に伊勢大神楽の神来舞の型と思われる彫物が見られたり、地車を先導する纏に伊勢大神楽の獅子頭を模した造形物が見られるなどの事例があるこ



写真39 昭和29年滝宮のものと考えられる太鼓台
 「保存版小豆島・豊島今昔写真帖」掲載写真より筆者模写

とが紹介されている。森田は大神楽を歓待する地域住民たちの「思い入れの強さが感じられる」と述べている。筆者はそこに、大神楽の視覚的要素の大衆性という側面も加えたい。唐獅子の獅子頭や、その頭をかぶって鈴や御幣を振りながら舞う姿、そして曲芸をする姿は、人々にとって馴染みが合っ
てわかりやすく、神聖性・祝祭性がありながらもコミカルであるため、絵画や造形物に表されることが多かったのではないだろうか。大神楽の獅子頭がサッカーの本田選手と一緒に並んでいるのを見ると、その大衆性というものが時代を越えて未だに生きているのだと感じさせられる。

4-3. 舞や囃子の伝播

伊勢大神楽の回檀地域において、伊勢大神楽から舞や囃子の教えを受けて地域の芸能として伝承する事例は西日本一帯に広く見られる⁵³⁾。また、直接教えは受けていないが見て学んだという地域も少なくない。一方、香川県では大神楽が島嶼部しか廻らないことや、地元の獅子舞が盛んなことが影響しているのか、他の地域のようにいわゆる「伊勢大神楽系統」だと言えるような獅子舞の存在は確認されていないという⁵⁴⁾。また小豆島の場合、獅子舞を伝承している集落自体が少ない⁵⁵⁾。その代り、先の王子地区のように舞は伝承されていなくても夏祭りの際に獅子頭を持って家々を訪ね歩く風習がある集落は何か所かあるものと思われる⁵⁶⁾。2017年に伊喜末地区の回檀中、70代位の女性たちが伊勢大神楽の獅子舞を見ながら「お伊勢さんの獅子は優雅な感じがする。長浜地区からやってくる獅子はアバレジシで、練習したりするものではないから全然別物や。」ということをやっていた。

ただし、小豆島に伊勢大神楽と同じ獅子舞の上演形式や旋律などを持つものがないとしても、全く影響を受けていないわけではないと考える。瀨崎に居住する神楽師の三木浩一氏は、長浜地区の青年団に笛と神来舞を教えに行ったことがあるという。大神楽の笛の旋律を教えるだけでなく、地域の囃子を吹く際に必要な基本奏法なども教える場合もあったようである。また、伊勢大神楽では神楽師が自ら笛を作るため、地域の人に作って贈ったという話も各所で聞かれ、太鼓や獅子頭などの道具の直しを頼まれたりするケースが散見される。このような細かい事例を見ていくと、大神楽から小豆島の地元の芸能への「直接的な伝播」は見られなくとも、様々な接点があることがわかる。小豆島や他の瀬戸内海の島々に関しても今後より詳細なインタビュー調査が必要である。

5. 結論

ここまで伊勢大神楽森本忠太夫組の小豆島での回檀への同行調査の成果を報告してきたが、本稿を通じて以下のようなことが明らかになった。

1. 伊勢大神楽は、小豆島の地域の生活や信仰に則した形で回檀を行っている。特に、秋祭りの直前に訪れるという季節感が特徴的である。
2. 森本忠太夫組の場合、神楽師の三木浩一が小豆島に居住していることや、小豆島出身の神楽師がいたことによって地域住民とのつながりが深まり、様々な便宜が図られた。
3. 戦後の小豆島の産業の変化は顕著である。とくに農漁業、旅館業などは戦前と比較しがたいほど小規模になっており、回檀先の家の生業の変化や、神楽宿の変遷、総舞の件数の減少などを通

じてもこれを知ることが出来た。

4. 以前は土庄町各地の神社で総舞が開かれたが急激に無くなっている。唯一現在でも小規模の総舞が開かれる土庄本町の王子地区では、伊勢大神楽が以前見繕った獅子頭を地元の住吉神社の夏祭りに用いており、香川県内では特別な事例といえる。
5. 小豆島をはじめとする瀬戸内の島々では島民による歌舞伎や芝居を楽しんだり、放浪の旅芸人たちを呼んで興行をすることが盛んであったことも、大神楽を迎える風習と関係があったと考えられる。
6. 島内各地の八幡神社地域の秋祭りとは、伊勢大神楽には直接的な関係があるとは言い難いが、四海の小海地区では2016年のつくり太鼓（山車）のモチーフに伊勢大神楽の獅子頭を選んでおり、現在でも伊勢大神楽が持つ地元への影響力や、大衆性が示された。
7. 小豆島に伝わる獅子舞と伊勢大神楽の間には、舞の演目や笛の旋律などに直接的な伝播関係は見つけられなかったが、神楽師が笛や舞を教えたケースがあったということがわかった。

また、近年小豆島では少子高齢化が著しい。土庄町では2015年4月1日に土庄小学校、湊崎小学校、北浦小学校、四海小学校の4校が、土庄町立土庄小学校に統合された。2017年4月には小豆島高等学校と土庄高等学校が統合され、小豆島中央高等学校が島で唯一の高校となった。統廃合によって、これまで学区ごとに形成されてきたコミュニティが弱まることが懸念されている。祭りの太鼓台に乗る子どもがいないという言葉もほうほうで聞かれた。

また高齢化が進み、大神楽が訪ねる家々も年々、忌中が増えている。2016年から2017年にかけて幣束を作ってほしいと頼まれる家がなくなった件や、祭礼の負担を減らすのに苦心しているという上庄の方の話からは、それぞれの地域や家で守ってきた信仰のかたちが、お年寄り世代で途絶えつつある現状を示していた。大神楽を迎える風習とて、楽観できるものでは決してないといえるだろう。

しかし、研究者としてはこうした現状を悲観するだけにとどまらず、大神楽が今日もつぶさに歩き続ける現場を見守り続け、彼らを迎えるお年寄りたちから島の古い民俗信仰や習慣を聞き、大神楽との関係の歴史についての調査をより一層詳細に進めるとともに、持続可能な現代の農漁業の方向性や、若手による地域活性化への取り組みなどにも着目し、地域に還元していかなければならないといえる。

※本稿の作成にあたり多大なるご協力を賜りました伊勢大神楽森本忠太夫親方をはじめ社中の皆様、伊勢大神楽講社の皆様、川井和朗先生、ほか土庄町各地の皆様に心より御礼申し上げます。

《注》

- 1) 指定名称は「伊勢太神楽」であるが、伝承者らは長きにわたって「大神楽」の字を用いてきたため、本稿でもこちらを採用する。
- 2) 堀田吉雄「伊勢太神楽 太夫村の獅子舞」『伊勢民俗復刻合冊』第3号、2002（初出1953）年、3-15頁
- 3) 北川央「伊勢大神楽の展開－檀那場の形成をめぐる－」『宗教民俗研究』9号、1999年「伊勢大

- 神楽の回壇と地域社会」『漂泊の芸能者』岩田書院、2006年、5-39頁、『神と旅する太夫さん』岩田書院、2008年、「伊勢大神楽にみる「靈性」「聖性」の付与：信仰が地域（ムラ）をこえる理由」『宗教民俗研究』19号、2009年、52-69頁など多数。
- 4) 森田玲「伊勢大神楽の音曲構成」『たいころじい』第32号（財）浅野太鼓文化研究、2008年、「伊勢大神楽の神楽囃子研究－音曲構成の特徴と他分野諸芸能との関連性」『民俗音楽研究』36号、2011年
 - 5) 黛友明「神事芸能とその実践－伊勢大神楽講社加藤菊太夫組の事例から－」、「待兼山論叢日本学篇」、46、2012年、「芸能・共同体・関係性：伊勢大神楽の事例を通じて」、日本学報、2014年など
 - 6) 森川奈津美「岡山県下における伊勢大神楽の回壇と地域社会」『岡山民俗』23号、2014年
 - 7) 水野一典「フナジョタイ－伊勢大神楽の旅」『四国民俗』43号、2011年、「カマドを清める人々－伊勢大神楽を中心として－」『阿波木偶箱廻し調査報告書－箱廻しの足跡調査を中心として－』、阿波木偶箱廻し調査・伝承推進実行委員会、2014年、羽床住人（水野氏のペンネーム）「伊勢の風－大神楽を迎える人々」『四国民俗』40号、2008年、「島へきた伊勢大神楽：こなくなった組について」『四国民俗』44号、2012年
 - 8) 檀那場を回るという意味で堀田吉雄が用いた学術用語。
 - 9) 北川央『神と旅する太夫さん』岩田書院、2008年
 - 10) 現在は陸続きになって坂出市瀬居町となっているが本稿では便宜上「島」と表記する。
 - 11) 瀬戸内海の島々にはもともと森本長太夫組や加藤源太夫組も訪れていたが、両組とも廃業になり、現在は大神楽講社に属さない他の組が廻っているか、もしくは完全に行かなくなっている。
 - 12) 『香川県史』515頁によれば、手島には「太々神楽」は土用の頃に岡山県の日々から船を借りて渡ってきて、船で寝泊まりしていたという。初穂は麦で出し、総舞のときにはまた別途に麦を集めたのでこれを「麦寄せ」と言ったという。
 - 13) 『本四架橋に伴う島しょ部民俗文化財調査報告 第1年次』37頁によれば、1970年代までは沙弥島に来ていたということである。こちらも瀬居島と同じく1967年に埋立てにより坂出市と地続きになった。
 - 14) 森本家所蔵初穂帳のうち、明治32年と大正15年、および森本忠太夫親方へのインタビュー（2017年11月）を参照にした。
 - 15) 地区の分類は各地区八幡神社の太鼓台奉納地によるものを採用した。
 - 16) 水野一典氏に解釈を伺った。
 - 17) こちらも水野一典氏による解釈を参照した。
 - 18) 森本長太夫組は7月から8月にかけて小豆島を廻るが、その年に雨が多くて廻りきれず秋に再び訪れていたのが、大谷での総舞を手伝ってもらったという。年代は未詳。（森本忠太夫親方インタビュー、2018年2月2日）
 - 19) 水野一典2011年
 - 20) フナジョタイから陸地での宿に変わった正確な年代はわかっていない。
 - 21) 大正、昭和初期の森本忠太夫組の出納帳に「伊喜末宿代」とある。

- 22) 森本忠太夫親方によれば、鹿島でお祓いに行く家の主人が「うちが宿をしていた」と言っていたとのことであった。親方が神楽に入った昭和30年代（1954年頃）には既に三高野旅館から全ての集落に通っていた。（森本忠太夫親方インタビュー、2017年10月5日）
- 23) 内部の符牒では「ツナギ」と呼ばれる。規模の大きいものは「カイキリ」とも呼ばれる。地域では様々な呼ばれ方をするが、小豆島では「オオカグラ」などとも言われていた。
- 24) 伊勢大神楽講社に属する太夫家は世襲制で継承されている。それぞれの組で「親方」と呼ばれる太夫は基本的に家系で継承され、その組で長年勤めるベテランの神楽師であっても太夫家出身者でなければ親方になることは現在は原則認められていない。森本忠太夫組の場合、先代の森本忠太夫（信一）が早くに引退したため、現在の八代目忠太夫（英明）が成人するまで、三木辰美が親方代理を務めていた。内部では、こうした役回りの人を便宜的に「番頭」と呼んでいる。
- 25) 偶然同じ三木姓だが三木辰美とは親戚関係では無い。結婚した当時すでに湊崎の三高野旅館は廃業していたが大神楽は引き続き三木家に世話になっていた。
- 26) 和田仁監修『目で見る小豆島の100年』、郷土出版社、2000年、30頁
- 27) 谷岡稔監修『保存版小豆島豊島今昔写真帖』、2010年、32-33頁
- 28) 宮本常一「小豆島大谷の漁業」、『近畿民俗』、1939年2月、23頁
- 29) 宮本常一1939年、26頁
- 30) 土庄町誌編集委員会『土庄町誌』、1961年、792-794頁
- 31) 森本忠太夫親方によると、岡山県の宇野港に程近い向日比では漁師町だが昔から初穂に白米を出すことが村の仕来りになっており、今でもかならず多くの家々から一升ずつの米が出るのは例外的だ、ということだった。（森本忠太夫親方インタビュー 2017年11月18日）
- 32) 土庄町誌、794-796頁
- 33) 高橋春成、『泳ぐイノシシの時代：なぜ、イノシシは周辺の島に渡るのか?』サンライズ出版、2017年
- 34) 土庄町誌、394頁
- 35) 台所まで上がらない場合は玄関先から台所の方向を向いて竈祓いをする。
- 36) 本島は面積が6.74km²、人口は337人（平成30年2月1日度時点、丸亀市ホームページより）。一方、小豆島は面積153.3km²、人口は土庄町が14,002人（平成27年時点）、小豆島町が14,304人（平成30年1月1日時点）である。
- 37) 森本忠太夫親方インタビュー、2017年11月
- 38) 羽床住人（水野一典氏のペンネーム）「伊勢の風－大神楽を迎える人々－」『四国民俗』40号、2008年、53-57頁
- 39) 堀田吉雄1953年、11頁
- 40) 山本氏によれば現在も天神神社では子どもたちによって獅子舞が演じられている。
- 41) このように伊勢大神楽が獅子頭を地域の神社や自治体に奉納するケースは他にも見られるようであり、加藤菊太夫組が元旦に訪れる滋賀県東近江市八日市の野々宮神社には、以前この地を回檀していた岡田忠太夫組と、現在回檀している加藤菊太夫組の獅子頭がそれぞれ奉納されている。

- 42) 香川県教育委員会「香川県の農村舞台 農村舞台緊急調査報告」1974年、2頁
- 43) このように雨天時に室内で総舞を行う場合によく演じられる演目には、他の曲芸ほど高さが必要ない「傘の曲」や「劔三番叟」、演劇的要素が強く上演時間の長い「玉獅子」が挙げられる。
- 44) 香川県教育委員会、前掲書、1頁
- 45) 守屋毅「瀬戸内の文化と芸能－船からみた民俗誌－」『瀬戸内の海人文化』1991年、266-268頁
- 46) 郡司正勝『地芝居と民俗』1971年、235頁
- 47) 黛友明「伊勢大神楽における歴史と実践－「継続」の民俗誌的記述－」大阪大学大学院博士学位論文、2017年
- 48) 小豆島および周辺地区の秋祭り太鼓台奉納日程は次のようである。
10月11日茸田八幡神社（小豆島町福田）、13日伊喜末八幡神社（土庄町伊喜末）、14日土庄八幡神社（土庄町大木戸）、15日内海八幡神社（小豆島町馬木）、富丘八幡神社（土庄町湊崎）、16日池田亀山八幡宮（小豆島町池田）、18日家浦八幡神社（土庄町豊島）、21日唐櫃八幡神社（土庄町豊島）
- 49) 伊勢大神楽でも魁曲という演目の最後に、台師の上で花魁に扮した獅子が傘と着物の袖を振りながら舞う場面において伊勢音頭（ヤートコセ、ヨ－イワナ）が唱和される。小豆島もまた太鼓台の奉納の際に伊勢音頭が歌われるため、同じ伊勢音頭文化圏であるといえる。今では総舞が少なくなりましたが総舞の最後を飾る魁曲の際には小豆島の人々も一緒になってヤートコセを歌ったことだろう。
- 50) 森本忠太夫親方インタビュー、2018年2月2日
- 51) 藤井豊『太鼓台 小豆島の秋まつり』、月刊「び～ぷる」、1998年、47頁、香川県教育委員会「香川県の祭り・行事－香川県祭り・行事調査報告書－」、2008年、71頁
- 52) 森田玲「伊勢大神楽の音曲構成」『たいころじい』第32号（財）浅野太鼓文化研究、2008年、89頁
- 53) 野津龍『伊勢大神楽－成立と地方伝播』日本写真出版、2000年、84-128頁、入江宣子「伊勢太神楽系獅子舞の舞曲構成と挿入歌について」『日本の音の文化』第一書房、1994年、181-208頁などに論じられている。
- 54) 水野一典「伊勢大神楽」瀬戸内海歴史民俗資料館『香川県の民俗芸能』1998年、96頁、溝渕茂樹「香川県の獅子舞概観－香川県民俗芸能緊急調査より－」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要（12）』1999年、19頁
- 55) 溝渕茂樹「小豆島北部の祭りと獅子舞－民俗芸能調査ノートから」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要（20）』2007年、1頁
- 56) 直接確認はできていないが、王子権現世話人の山本氏によれば土庄の天神神社では今も子ども獅子が出るといい、小豆島の聞き書きによれば鹿島明神にはむかし獅子頭が保管されていたという。

参考文献

- 香川県編『香川県史 第14巻（資料編 民俗）』、香川：高松市、1985年、338, 351, 515頁
- 香川県小豆郡編『小豆郡誌』、1921年

- 香川県教育委員会『香川県の農村舞台 農村舞台緊急調査報告』、1974年
- 香川県教育委員会「香川県の祭り・行事－香川県祭り・行事調査報告書－」、2008年
- 川野正雄、『小豆島民俗誌』、東京：名著出版、1984年、36頁
- 川野正雄編、『内海町史』香川：内海町、1974年、677頁
- 北川央「伊勢大神楽の展開－檀那場の形成をめぐる－」『宗教民俗研究』9号、1999年
- 北川央「伊勢大神楽の回壇と地域社会」『漂泊の芸能者』岩田書院、2006年、5-39頁
- 北川央『神と旅する太夫さん』岩田書院、2008年、「伊勢大神楽にみる「靈性」「聖性」の付与：信仰が地域（ムラ）をこえる理由」『宗教民俗研究』19号、2009年、52-69頁
- 郡司正勝『地芝居と民俗』1971年
- 小豆郡民俗研究会編『小豆郡の民俗聞取り集土庄編1 土庄・淵崎地区』、2012年
- 小豆郡民俗研究会編『小豆郡の民俗聞取り集土庄編2 大鐸・北浦・四海地区』、2012年
- 小豆郡民俗研究会編『小豆郡の民俗聞取り集土庄編3 四海・豊島・大部地区』、2012年
- 瀬戸内海歴史民俗資料館『本四架橋に伴う島しょ部民俗文化財調査報告 第1年次』、1981年、37頁
- 高橋春成、『泳ぐイノシシの時代：なぜ、イノシシは周辺の島に渡るのか？』サンライズ出版、2017年
- 谷岡稔監修『保存版小豆島豊島今昔写真帖』、2010年
- 土庄町誌編集委員会『土庄町誌』、1961年
- 野津龍『伊勢大神楽－成立と地方伝播』日本写真出版、2000年
- 藤井豊『太鼓台 小豆島の秋まつり』、月刊「び～ぶる」、1998年
- 堀田吉雄「伊勢太神楽 太夫村の獅子舞」『伊勢民俗復刻合冊』第3号、2002（初出1953）年、3-15頁
- 黛友明「伊勢大神楽における歴史と実践－「継続」の民俗誌的記述－」大阪大学大学院博士学位論文、2017年
- 溝渕茂樹「香川県の獅子舞概観－香川県民俗芸能緊急調査より－」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要（12）』1999年
- 溝渕茂樹「小豆島北部の祭りと獅子舞－民俗芸能調査ノートから」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要（20）』2007年
- 水野一典「フナジョタイー伊勢大神楽の旅」『四国民俗』43号、2011年、95-103頁
- 水野一典「カマドを清める人々－伊勢大神楽を中心として－」『阿波木偶箱廻し調査報告書－箱廻しの足跡調査を中心として－』、阿波木偶箱廻し調査・伝承推進実行委員会、2014年、168-172頁
- 水野一典「伊勢大神楽」瀬戸内海歴史民俗資料館瀬戸内海歴史民俗資料館・編『香川県の民俗芸能－平成8・9年度香川県民俗芸能緊急調査報告書－』、香川、1998年、95-96頁
- 羽床住人（水野一典）「伊勢の風－大神楽を迎える人々－」『四国民俗』40号、2008年、53-57頁
- 羽床住人（水野一典）「島へきた伊勢大神楽～こなくなった組について～」『四国民俗』44号、2012年、17-20頁
- 宮本常一「小豆島大谷の漁業」『近畿民俗』、1（1）号、1939年2月、23頁
- 森川奈津美「岡山県下における伊勢大神楽の回壇と地域社会」『岡山民俗』23号、2014年、37-54頁
- 森田玲「伊勢大神楽の音曲構成」『たいころじい』第32号（財）浅野太鼓文化研究、2008年

森田玲「伊勢大神楽の神楽囃子研究－音曲構成の特徴と他分野諸芸能との関連性」『民俗音楽研究』
36号、2011年、37-46頁

守屋毅「瀬戸内の文化と芸能－船からみた民俗誌－」『瀬戸内の海人文化』1991年

和田仁監修『目で見ると小豆島の100年』、郷土出版社、2000年

A Study on the Relationship between the Folk Culture of Shodoshima Island and *Ise-daikagura*

KAMINO Chie

Ise-daikagura is professional ritual performers who perform *shishimai* – a lion dance and acrobatics for purifying the deities of houses and villages in Kansai region, south-western areas of Japan. There are 5 official groups belonging to the *Ise-daikagura Kosha*, an association which is located in Kuwana city, Mie prefecture. The present research focuses on *Morimoto-Chudayu* troupe within the association, which visits Shodoshima island every October for their traveling ritual. The purpose of this paper is to reveal the mutual relationship between the local culture of Shodoshima island and *Ise-daikagura* from the perspective of livelihood, folk belief, and folk festivals.

The first chapter introduces the historical, territorial backgrounds of *Ise-daikagura*'s ritual in Shodoshima. Chapter 2 analyses the relationship between the livelihood such as fishing, agriculture and hotel business in the island and *Ise-daikagura*'s visit. Chapter 3 reports that the folk beliefs in deities of home and village shrines are connected to the warm treatment of the villagers who welcome *Ise-daikagura* annually. Chapter 4 shows the influence of *Ise-daikagura* to the local festivals and performances.

From a series of investigations, the relationship between *Ise-daikagura* and the folk culture of Shodoshima island such as local festivals and folk performances are thought to be comparatively indirect and fluent while the villagers' folk religious beliefs and the strong expectation for the visiting performers are thought to have obvious connections to the culture of welcoming *Ise-daikagura*'s performance every year.